

原 著

## 当科における腹腔鏡補助下胃切除術 —導入から10年間の成績—

村上 仁志, 利野 靖, 湯川 寛夫, 菅野 伸洋,  
松浦 仁, 益田 宗孝, 今田 敏夫

横浜市立大学 外科治療学・一般外科

**要 旨:** 当科では2000年より早期胃癌に対して腹腔鏡補助下胃切除術を導入し, この10年間で102例に施行してきた。これらの治療成績について検討を行った。102例のうち72例に腹腔鏡補助下幽門側胃切除術 (Laparoscopy Assisted Distal Gastrectomy: LADG) が行われた。手術手技の習熟について検討を行ったところ, 施行症例数とリンパ節郭清個数で正の相関が, 施行症例数と手術時間, 出血量で負の相関が認められ, 約30例で手技の安定が得られた。手技の安定が得られた後半5年間で開腹術 (open Distal gastrectomy: ODG) と比較し検討を行った。手術項目の中央値は手術時間338分, 出血量121ml, リンパ節郭清個数28個であった。同時期に施行した開腹幽門側胃切除術と比較すると, 手術時間は同時期に行われた開腹手術に比較し長い, 郭清個数に差はなく, 出血量は少なかった。術後在院日数の中央値は9日間であり, 合併症発生率は2例, 4.5%で低率であった。開腹術への変更, フォローアップ中の再発は認めなかった。早期胃癌に対する腹腔鏡補助下手術は, 手技に習熟が必要で手術時間は長い, 低侵襲であり, 根治性, 安全性の面で開腹術に劣らないと考えられた。

**Key words:** 腹腔鏡補助下胃切除 (laparoscopy-assisted gastrectomy), 早期胃癌 (early gastric cancer), 低侵襲手術 (less invasive surgery), 治療成績 (short term outcome)